

平成 20 年度  
入学試験問題

国 語

特待生  
前期

受験番号	氏 名

中村中学校

□一 次の(1)～(10)の——線部のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みを答えてください。

- (1) 王様の命令にフクジュウする。
- (2) いやな予感がテキチュウした。
- (3) 彼の仕事にはネンリンを感じる。
- (4) ドウシンにかえって遊ぶ。
- (5) ヒウンの主人公。
- (6) この正月には帰郷する。
- (7) こどものころは借家にすんでいた。
- (8) 運動会で旗手をつとめた。
- (9) 質問コーナーを設ける。
- (10) 別便で心ばかりの品を送ります。

〔二〕 次の会話文の中から、不適切な表記・表現を五カ所ぬき出し、それぞれ適切な形に改めてください。

先生 「晶子さん、こんにちわ。冬休みはどこかへ行ったのですか。」

晶子 「先生、お久しぶりです。冬休みは北海道へスキーに行ってきました。なので、こんなに日焼けしてしまいました。スキーをしたのは初めてだったのですが、とても楽しかったです。」

先生 「それはよかったわね。それ意外には、何かよい思い出はできましたか。」

晶子 「はい。動物園に行きました。間近でペンギンの散歩を見られて、とても感動しました。」

先生 「北海道では何かおいしいものは食べたのかしら。」

晶子 「ジンギスカンという料理がすごくおいしかったです。そうそう、先生におみやげのチョコレートを買ってきたので、ぜひいただいでください。」

先生 「まあうれしいわ。ありがとう。」

③ 次の文章を読み、後の問いに答えてください。

\*字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

「ものをつくるうえで大切なのは感性だ」というが、そもそも感性とは何なのか。

日本人は、漠然としたイメージだけで「感性」<sup>①</sup>という言葉が大事にしすぎているように思う。何かわからないながらも、とにかく大事にしないではいけないと包み込んで棚に上げて祀ってしまい、結局、みんなその実体がわからないままになっている、そんな感じがある。

「感性」という言葉でくくられているものを冷静に分析して整理していくと、もちろんその人の持つ感覚的なものもあるが、それ以上に、その人のバックボーンにあるものが基盤になっているのではないかと考えられる。

作家としては、いつも自分で新しい発想をして、自分の力で創作しているという意識でやっている。しかし実際には、僕がつくる曲は、僕の過去の経験、知識、今までに出会い聴いてきた音楽、作曲家としてやってくることで手に入った方法、考えたこと、それらの蓄積などが基になって生まれてくるものだ。さまざまなかたちで自分の中に培われてきたものがあるからこそ、今のような創作活動ができていくわけだ。

もし僕がクラシックを勉強してこなかったら、(A) ミニマル・ミュージックに影響を受けていなかったら、つくる音楽のスタイルも今とは異なるだろう。

「創作は感性だ」「作家の思いだ」と言い切ってしまうほうが作家としては恰好がいいが、残念ながら自分独自の感覚だけでゼロからすべてを創造するなんてことはあり得ない。

② とすると、僕は漠然とした感性なるもので創造をしているわけではないということになる。

作曲には、論理的な思考と感覚的なひらめきを要する。

論理的思考の基になるものが、自分の中にある知識や体験などの集積だ。何を学び、何を体験して自分の血肉としてきたかが、論理性の根本にある。

感性の九五パーセントくらいは、実はこれなのではないだろうか。

(B)、その論理性に基づいて思考していけば、あるレベルに達するものはいつでもできるはずだということになる。気分が乗った乗らないという次元に関係なく、きちんと仕事をしたらしたなりの成果を上げられる。

(C)、問題はそれさえあればものづくりができる、作曲ができるということではないところだ。肝心な要素は、残りの五パーセントの中にある。それが作り手のセンス。感覚的ひらめきである。創作にオリジナリティを与えるその人ならではのスパイスのようなもの。<sup>④</sup>これこそが「創造力の肝」だ。

ものづくりにおける核心は、やはり直感だと僕は思う。こっちの方向に行ったら何か面白いものができそうだというのは、直感が導くものだ。直感の冴えが、作品をどれだけ素晴らしいものにできるか、よりクリエイティブなものにできるかという鍵を握っている。

ところが、もっと突き詰めていけば、その直感を磨いているのも、実は自分の過去の体験である。ものをつくるということは、ここからここまでは論理性でここからが独自の感覚だと割り切れるようなものではなくて、自分の中にあるものをすべてひっくりめたカオス状態の中で向き合っていくことだ。

論理や理性がなければ人に受け入れてもらえるようなものはつくれないが、すべてを頭で整理して考えようとしても、人の心を震わせる音楽はできない。<sup>⑤</sup>秩序立てて考えられないところで苦しんで、もがいて、必死の思いで何かを生み出そうとする。その先の、自分でつくってやろう、こうしてやろうといった作為のようなものが意識から削ぎ落とされたところに到達すると、人を感動させるような力を持った音楽が生まれてくるのだと思う。

論理性と感覚的直感との兼ね合いを九五パーセントと五パーセントといったが、これは僕自身が置かれている状況によっても感じ方が変わる。

自分の勉強不足を感じて、もっといろんなことを見たり聴いたりして吸収して経験

知を蓄えなければいけない、と痛感しているときにはそちらの比重が増して、「九九パーセントくらいは蓄積がものをいうんじゃないか」と思う。

逆に、作曲活動に入って苦しみ悩んでいるときには、「蓄積で書けりゃあ、苦勞はしないよ。直感が大事なんだよ」という気分になる。絶えず揺れ動いているのだ。

うまく核心をとらえることができる、つくっているものが納得いくものになる。

実のところ、これが難しい。そのセンス、直感の啓示のようなものをつかみとるかというところで、誰もが悩む。僕もまた、そこで日々苦しんでいるといえる。

ある映画なり、コマーシャルなりの作曲依頼がくる。渡された台本を読んだ。監督と打ち合わせをして、映像で表現したいことも聞いた。僕は、この段階で受けた最初の印象というのを結構大事にしている。

第一印象としてのイメージといっても、具体的にぱっとメロディーが浮かぶこともあれば、なんとなく雰囲気を感じるだけだったりもする。

CMのときなどに多いのだが、例えば「これは鋭角的で尖っている感じ」とか、「丸くて柔らかいイメージ。色でいえば、パステル調の淡い色合いの雰囲気」といった、音楽とは直結していないようなイメージである場合もある。はっきりとしたビジュアルが目浮かぶこともある。

そういった初めに感じたものを流してしまわず、資料の裏などにメモしておく。台本を読んでいるうちにメロディーが浮かぶようなときは、台本の裏にさっと五線を引いて書きとめる。

ただし、メロディーを思いついたとしても、それをそのまま使うわけではない。そこから、こういうコンセプトだからどういうものにしないでいいのか、どんなリズムでいくか、どんな楽器を使うか、と考えて実際に曲づくりをしていくうえで、この最初に浮かんだものが役に立つことが意外に多い。

時間をかけていろいろ模索していくうちに、つくるべきものがどんどんはっきり見えてくる場合と、逆にどんどん迷路にさまよい込んでしまう場合とがある。方向性に

迷ったときは、僕は初めのイメージに立ち返る。考えすぎて見失ってしまうものもある。この仕事で何を求められているのか、それを自分は最初にどう受けとめたのか、というところに戻るのが一番いい。

面白いのは、最初に思いついたメロディーのことなどはすっかり忘れてしまっているが、あれこれやっているうちに、また最初のイメージに戻るときがあることだ。意外にそういうことは多い。第一印象というのは、つくり手として「いいものをつくってやろう」という思いから生じる余計な観念にまだ支配されていないから、感じたまが最も素直に表れている。それがいいのだと思う。

※ ゲーテの言葉にもある。Ⅰは欺かない。Ⅱが欺くのだ」と。

(久石 譲『感動をつくれますか?』)

※バックボーン……精神的な支えとなる経験や思想。

※クラシック……西洋の古典音楽。

※ミニマル・ミュージック……短いメロディーの型を少しずつ変化させながら反復する音楽。

※クリエイティブ……創造的。

※カオス……入りまじって区別がつかないさま。

※啓示……あらわし示すこと。

※コンセプト……全体をつらぬく統一的な視点や考え方。

※ゲーテ……ドイツの作家。

問一 —— 線①とありますが、「感性」の背景にあるものは何ですか。本文から十三字でぬき出してください。

問二 (A) ～ (C) にあてはまる語を次からそれぞれ選び、記号で答えてください。

ア、だが      イ、あるいは      ウ、たとえ      エ、つまり

問三 —— 線②とありますが、どういうことですか。その説明として最も適当なもの  
を次から選び、記号で答えてください。

ア、自分は作曲家であるという明確な意識を持って曲作りをしているということ。  
イ、普段目や耳にしているものがものづくりの発想の源になっているということ。  
ウ、クラシックや、ミニマル・ミュージックの影響が必要だったということ。  
エ、どの分野を選ぶかによって、創造されるものの形が変わってくるということ。

問四 —— 線③「それ」の内容を三十字以内で答えてください。

問五 —— 線④とありますが、どういうことですか。説明してください。

問六 —— 線⑤とありますが、人の心を震わせるような音楽を作るために必要だと  
筆者が考えていることとして、あてはまらないものを一つ選び、記号で答えて  
ください。

ア、作家としての思いにこだわることなく、直感を導くために冷静になること。  
イ、自分のすべてをひっくりかかす状態の中から、核心をつかみ取ること。  
ウ、経験知を蓄えつつセンスを磨く中で、よいものを生み出そうともがくこと。  
エ、自分独自のものや新しい発想などを生みだそうという考えを解放すること。  
オ、状況によって、論理性と感覚的直感のバランスをうまく調整していくこと。



問七 ——— 線⑥とありますが、なぜですか。説明してください。

問八 

I
---

・

II
----

 に入る語の組み合わせとして適当なものを次から選び、記号で答えてください。

- |        |       |
|--------|-------|
| ア、I 理性 | II 感性 |
| イ、I 過去 | II 未来 |
| ウ、I 感覚 | II 判断 |
| エ、I 作為 | II 自然 |

問九 本文の内容に合っているものを二つ選び、記号で答えてください。

- ア、日本人はものづくりに入る前に、まず感性という言葉进行分析し、その実体を明らかにすることが必要である。
- イ、持って生まれた感性がどんなに優れていても、それだけでは何かを作っていないということとは誰にもできない。
- ウ、音楽と全く関係のない分野が、ものをつくる過程で感覚的ひらめきをつかみ取るための糧になることがある。
- エ、時間をかけて考える中で迷うことも出てくるが、作品の方向性をつかんでいれば、最初のイメージにもどることができる。

四 次の文章を読み、後の問いに答えてください。

「あのねえちゃん、お父さんのお相撲、まだあ？」

台所脇の居間のテーブルで、五歳になったばかりの琴世が多美子に声を上げた。

琴世とテーブルで向かい合っているのは、多美子と同様白い割烹着を着た伸江だった。伸江は琴世のお人形遊びの相手をしてやっていた。

伸江は地区の手伝いとして陣宿にやってきた、十人ばかりの女衆の一人である。

「あらあら、琴世ちゃんはまあだそんなこといってる。お母ちゃんはあの姉ちゃんじゃないよ、お母ちゃんだよ。いってみなさい、お母ちゃんって。簡単だよ。一度いってしまえば恥ずかしいことなくなるもんなんだから。簡単なんだから。ほら、お母ちゃんって呼んでみな」

伸江は額に小さな皺を寄せ、柔和なまなこを広げて琴世の顔を覗き込んだ。短くカットした髪が、快活な伸江によく似合っている。

台所とその脇の居間には、多美子と琴世、伸江の三人だけである。一時間ほど前までは、手伝いの女衆がいたのだが、全員が相撲見物に出払ってしまったのだった。

① 琴世はどうにも気恥ずかしそうに身をよじり、口を閉じたままチラチラと上目づかいに多美子を見上げた。

「お母ちゃんをお母ちゃんと呼ぶのに遠慮なんかしないの。誰のお母ちゃんでもないんだよ。琴世ちゃんのお母ちゃんなんだから。恥ずかしいことなんかないんだよ。いっぺんさっといえば、あとはどうってことないんだからさ。ほら、いってみようよ。はい、お母ちゃん」

伸江は琴世に顔を近づけ、さらに覗き込むようにして促した。

琴世はますますギョツと口を強く結び、恥ずかしそうな照れ笑いと一緒にうれしそうな表情を隠そうともせず、赤く火照らした顔でチラチラと多美子の反応を窺うように見上げるのだった。

「ほら、そうそう、もう少しだ。恥ずかしがらなくていいんだよ。はい、頑張がんばってみよう、お母ちゃんって。ほら、お母ちゃん」

「いいのよ、伸江さん。私はあの姉ちゃんでもいいんだから」

多美子は苦笑まじりにいって、琴世に笑みを投げかけた。

②「いいよ琴世ちゃん。琴世ちゃんがお母ちゃんをあの姉ちゃんって呼びたければ、お母ちゃんはそれでもいいんだからね」

「何いってんのよ多美ちゃん。琴世ちゃんはお母ちゃんって呼びたくてうずうずしてるんだから。琴世ちゃんと一緒にいて分かるでしょう？」

「それは分かるけど、でも、無理やりいわせてもねえ。自然でいいの、自然で。ケセ※ラセラでいこう」

多美子はすました笑いを伸江に見せた。

「本当に能天気だよねえ、多美ちゃんは。そんなこといってるから、琴世ちゃんはいつまで経たってもお母ちゃんっていいないんじゃないのお？ あんたたち二人を見てるともういじらしくて。大丈夫、まかせといて。私がちゃんとお母ちゃんといえるようにしてあげるから。ねえ、琴世ちゃん」

琴世は多美子が産んだ子ではない。先妻せんさいの麻里まりが産んだ子である。

多美子は麻里とは中学以来の親友であった。二人は麻里が坂本英明さかもとひであきと結婚してからも変わらぬ親交を続けていたのだが、麻里は琴世を産んで一年後に突然この世を去った。進行の速いガンであった。体調が優れないと訴うえてから、わずか三カ月の（Ⅰ）死だった。

麻里の死後、多美子は親友の忘れがたみである琴世を不憫ふびんに思い、毎日のように訪おとずれては何くれとなく世話を焼いてきた。琴世も多美子によくなつき、二人の仲は傍目はためにも微笑ほほえましいほどであった。

「おばちゃん、あのねえ、あのねえ、それでねえ」

琴世は多美子が現れると片時も側を離れようとせず、言葉を覚え始めたばかりの（Ⅱ）語り口で一生涯懸命に話し続けた。言葉がとぎれでもしたら多美子が帰ってしまうのではないかと必死に言葉をつないでいるような勢いだった。

「おばちゃんじゃないでしょう、お願いだから、お姉ちゃんとか、多美姉ちゃんって呼んでよ。多美ちゃんでもいいよ」

と多美子が何度も懇願しているうちに、あのねえちゃんと琴世が呼び始め、おばちゃんよりはいいか、姉ちゃんだし、と多美子が納得してしまった。

麻里が死んでから三年が経った半年前、英明との結婚を決意した多美子が、

「琴世ちゃん。あの姉ちゃんね、琴世ちゃんのお母ちゃんになってもいいかな？」

と告げた時、<sup>③</sup>琴世はポカンとした表情で固まってしまった。

「あの姉ちゃんね、琴世ちゃんの新しいお母ちゃんになりたいんだ。琴世ちゃんがいってってってくれたらだけど」

多美子は琴世がどう反応するか不安だった。仏壇には麻里の写真があり、四歳になった琴世は死んだ麻里が母であり、いまは天国にいて見守っているということを理解してもいた。どう切り出せばいいのか迷って、新しいお母ちゃんという言葉を選んだのだった。ちゃんづけの方がより受け入れやすいようにも思えたのである。そう切り出したものの、琴世の反応は多美子にとってとまどうものだった。拒否の表情でもなければ容認するような表情でもない。目をぱちくりさせて、ただポカンとしているばかりなのだ。

「琴世ちゃんのお母さんは天国にいるよね。天国にいるお母さんは、お母さん。あの姉ちゃんは、新しいお母ちゃん。琴世ちゃんがあの姉ちゃんを新しいお母ちゃんにしてもいいってってくれたらだけど」

都万村の砂浜で二人は向き合っていた。琴世は立ち尽くしてポカンとし、多美子はしゃがんでいた。

おだやかな夕暮れだった。春霞はるがすみの海が淡いピンクに染まり始めていた。砂浜に打ち寄せるさざ波が、静かに寄せては返していた。

「あの姉ちゃん、琴世ちゃんと、琴世ちゃんのお父さんと、三人で一緒に暮らしたいんだ」

そう多美子がいうと、

「天国のお母さんは？」

とやっと琴世は口を開いたのだった。

「あ、ごめんごめん。天国のお母さんももちろん一緒。だって天国のお母さんは、あの姉ちゃんのとって大切な友だちだったんだから」

琴世はまばたきもせず多美子の目を覗き込み、それから（A）走り出した。

「琴世ちゃん……」

多美子が呆気にとられて立ち尽くしていると、琴世は砂浜の端まで行って引き返してきた。物凄いスピードで（B）走っていたが笑顔だった。うれしくて（C）走らずにいられないと喜んでいるはしゃぎように見えた。

すれ違い様、

「いいよ！」

と琴世は顔をパッと輝かせて叫ぶようにいった。

「……本当！」

「うん！ 競走！」

「ようしッ、負けないからねえ！」

「キヤハハハ！」

琴世の喜びはじける笑いが波打ち際を飛び跳ねていき、多美子のうれし涙が点々と砂浜に置き去りにされていった。

あれから半年がすぎたいまでも、琴世は多美子をお母ちゃんと呼んだことはない。ずっといい慣れたあのねえちゃんであった。

多美子の方は琴世に向かって、自分のことをお母ちゃんといっている。そういう続けていくうちに、いつかは違和感いわけんもとれて照れも消え、自然にお母ちゃんと呼んでくれるかもしれないと思つてのことだった。

「あのねえちゃん、お父さんのお相撲、見にいかないの？」  
と琴世がいった。

「あーあ、もう少しでお母ちゃんていいそうだったのに、もう、多美ちゃんがよけいなこというからだよ。ねえ、琴世ちゃん」

④ 伸江はさも残念そうに苦笑いをしながら多美子をなじるのだった。

「琴世ちゃんは、お父さんのお相撲見たいの？」

と多美子は伸江の苦笑を受け止めて琴世に笑つていう。

「うん。あのねえちゃんは？」

「うーん、お母ちゃんはおんまり見たくないなあ。何だか怖こわいんだ。もうドキドキしちゃってる」

「どうして？」

「どうしてって、何だか、心配で……」

「ケガするから？」

「うーん、そういう心配じゃなくてね……」

と多美子はいい澱よどんだ。

「お父さん、負けるから？」

琴世は気づかうように、伏目ふしめがちにおずおずという。

伸江ほがが朗らかに笑つて、

「何いってんのよ、琴世ちゃん。勝負は取ってみなけりや分らないんだからね。お父さんが負けると決まってる訳じゃないんだから」

と琴世の頭をなでた。

「でもみんなが、お父さんは勝てる訳ないって」

「誰がそんなこといったのさ？」

「シンちゃんとかヨツちゃんとか、みんないった。お父さんの相手は島で一番強いから勝てる訳ないって」

⑤ 「ああ、分かった」

と多美子が笑ってうなずいた。

「それでシンちゃんたちとケンカしたんだ。琴世ちゃん、どうしてケンカしたのかい  
わなかったけど、なるほどね、ケンカした理由はそれだったのか」

「あの子たちそんなこといったの？ 寄方はみんなで琴世ちゃんのお父さんをもり立  
てなくちゃならないのに、そんなこといっちゃいけないよねえ。そりゃ琴世ちゃんが  
ケンカするのは正しいわ。気にすることないよ琴世ちゃん。あの子たちは何にも分かっ  
ちやいないんだから」

伸江が琴世の肩かたに手を置いてなくさめた。

「でも、お爺ちゃんとかお婆ちゃんとか、お父さんもお母さんもいってたって……」  
琴世の口がすばまって言葉が消えた。

多美子は伸江と視線を合わせ、互たがいに言葉を詰つまらせた。誰もがそう思っているの  
は明白なことだったのだ。

(川上健一『渾身』)

※ケセラセラ……スペイン語。「なるようになる」の意。

問一 ―― 線①にある琴世の様子からどのようなことがわかりますか。説明してください。

問二 ―― 線②に見られるように多美子は自分のことを「お母ちゃん」と呼んでいますが、それはなぜですか。説明してください。

問三 (Ⅰ)・(Ⅱ)に入る語の組み合わせとして適当なものを次から選**び**、記号で答えてください。

- |     |       |   |      |
|-----|-------|---|------|
| ア、Ⅰ | そっけない | Ⅱ | うるさい |
| イ、Ⅰ | ふがない  | Ⅱ | はかない |
| ウ、Ⅰ | あどけない | Ⅱ | さびしい |
| エ、Ⅰ | あっけない | Ⅱ | つたない |

問四 ―― 線③について、次の各問いに答えてください。

(1) この時の琴世について説明したものとして、最も適当なものを次から選**び**、記号で答えてください。

- ア、天国のお母さんがいながら、あの姉ちゃんが自分のお母さんになるということが分からず、あっけにとられている。
- イ、天国のお母さんの前で、あの姉ちゃんをお母ちゃんと呼ぶのが恥ずかしくて黙**り込**んでいる。
- ウ、ずっと友達だと思っていたあの姉ちゃんが、お母ちゃんになることを受け入れることができず、抵**抗**している。
- エ、あの姉ちゃんと一緒に暮らせることに興奮し、高まる気持ちが激しく揺**れ**動いている。

(2) この琴世の反応を見た多美子の気持ちを説明してください。



問五 (A) (B) (C) にあてはまる語を次からそれぞれ選び、記号で答えてください。

ア、ようやく

イ、いきなり

ウ、どうにも

エ、懸命に

問六 —— 線④には、伸江のどのような気持ちがあると考えられますか。その説明

として最も適当なものを次から選び、記号で答えてください。

ア、多美子は琴世の母親としてまだまだ自覚が足りないと心配する気持ち。

イ、多美子のせいで琴世が苦しんでいることを、責め立てるような気持ち。

ウ、多美子はもっと思い切って行動すればよいのにと歯がゆく思う気持ち。

エ、多美子が今のような調子では親子関係が崩れてしまうと案じる気持ち。

問七 —— 線⑤とありますが、どのようなことがわかったのですか。説明してください。

さい。